

中学英語に於ける遅進生徒指導法仮説設定

その1 実態把握と問題点

盛 田 義 彦

I はじめに

昭和40年文部教研の中学英語科の全国共通主題は、「能力差に応ずる指導をどのようにしたらよいか」であった。名古屋地区研究会でも又、全国大会に於いても、根本的な解決というよりは、その解決のための教授法の研究、あるいは、「能力差」の意味などが話し合われたようである。

「能力差」を問題にした場合、「能力差に応じた教授法」を研究することと、「能力差をできるだけ少なくする指導法」つまり「下位生徒の学力を引きあげて、上位との差を少なくする指導法」を研究することの二つの意味が考えられる。

英語という中学生になってから新たに始める学科に於いては先ず後者の研究がなされねばならない。

本校中学生に於いては、一年の二学期頃から、下位生徒と上位生徒の差が大きく開いてくる。この差は是非とも縮めていかねばならないのである。その為には下位生徒の実態を把握して、問題点を明らかにする必要がある。

調査対象生徒は多い程よいが、資料入手困難から、現中学三年生（89名）とする。

II 遅進生徒の基準

遅進生徒という場合に、絶対的に学力不足で学習についていけない生徒と、その学級で、又その学年で、相対的に下位の学力を持つという場合がある。

相対的な遅進生徒が絶対的な遅進生徒かは、標準学力テストでおおよそ判別できるが、本校では、学期ごとの標準テストは行っていないので、ここに直接利用することはできない。従って、ここでは、「相対的な遅進生徒」を問題にしてみる。

「遅進生徒」をとり出すに当たり、学習評価も考えられるが、もう少し正確さを求めるために各学期の中間期末テスト（ただし、三学期は期末テストのみ）の標

準偏差を求め、 -1σ 以下を「遅進生徒」とすることにした。それは、学習評価において、一般に学習の困難点が多いと考えられる範囲の1の全部と2の半分程度を含むからである。

III 遅進生徒数

表1

遅進生徒数移動表（一度でも、その学年に遅進歴のある者を遅進生徒として）

	一年(38年)	二年(39年)	三年(40年)
	42名	22名	13+6名
新しく加わった者		4名	1名
”			1名
合計	42名	26名	21名

+6は再加入者

この表からわかること

- 遅進生徒数が学年が進むに従って減っている。
このことは、ここでは「相対的な遅進生徒」を問題にしているのであるから遅進歴（ -1σ 以下をとる回数）が特定生徒に集中してきたことを示すのではないであろうか。
- 一年から引き続いて遅進生徒になる者が非常に多い。従って、一年の時期に問題があるのではないだろうか。
- 二年三年に新しく遅進生に加わる者が少ない。
このことは、一年の時期に遅進生になっていなければその後遅進生になることが少いといってもよいのではないだろうか。

IV 遅進生徒の学習成績の移行

表2 一年一学期に遅進生になった者(19名)

事項	学年			
	一年 二, 三学期	二年	三年	三年
-σ以下を	1回	3名	4名	3名
	2回	7名	2名	1名
	3回	3名	1名	0名
	4回		2名	6名
	5回		3名	
	0回	6名	7名	9名
延回数		26	34	29

この表から解ること

- 学年が進むに従って、1回、2回の合計では-σ以下をとる者が少くなり、多回数、-σ以下をとる者が多くなっている。このことは、先の表1において、遅進生徒歴が特定生徒に集中してくると述べたことと、同じことを意味するであろう。
- 0回の者が、わずかながら学年が進むにつれて増している。これは遅進生の学力回復を示すものとも考えられるが、上位に回復することはむずかしいようである。(後述)

表3 一年二学期に遅進生となった者の数(22名)

事項	学年			
	一年 三学期	三年	三年	三年
-σ以下を	1回	8名	6名	2名
	2回		1名	1名
	3回		1名	2名
	4回		0	3名
	5回		0	
	0回	14名	14名	14名
延回数		8	11	22

この表からわかること

- 学年が進むと、3回、4回と-σ以下をとる者が多くなる。これは前にも述べたように遅進生の固定化と言えるであろう。
- 0回の者が各学年22名中約 $\frac{2}{3}$ ある。このことは二学期に遅進生になっても回復の望みが大きいことを示すのであろう。

表2の0回の人数を考えあわせると、二学期に遅進生になった者の方がずっと回復率が高いと言える。

遅進生徒の学力回復

表4 一年一学期に遅進生になった者

事項	学年			
	一年 二・三学期	二年	三年	三年
偏差0以上 +σ未満を	1回	3名	4名	1名
	2回	1名	1名	3名
	3回	0	0	2名
	4回		1名	2名
延回数		5	10	21
+σ以上を	1回	0	0	0名
	2回	0	1名	0名
延回数		0	2	0

この表からわかること

- 二年生から三年にわずかずつ回復する人数が増してくる。

表5 一年二学期に遅進生になった者

事項	学年			
	一年 三学期	二年	三年	三年
偏差0以上 +σ未満を	1回	6名	5名	4名
	2回		9名	1名
	3回		4名	4名
	4回		2名	5名
延回数		6	43	38
+σ以上を	1回	0	0	1名
延回数		0	0	1

この表からわかること

- 二年三年に回復する人数がとても多くなる。
- 表4と表5を比較してみると、一年二学期に遅進生になった者の方が、はるかに回復する率がよい。しかし、その回数も+σより上になることはまれである。

V この調査の問題点

数字の上では以上のようなことが出て来たのであるが、これ等の数字に十分な信頼をおくことに、次の点で危険である。

- 調査対象が一学年のみである。
- テストの一部のものは、正常分布曲線から、大分はずれた曲線になった。

VI おわりに

Vに述べたような問題点はあるが、ここに以上のことをまとめてみると、

1. 遅進生徒は、学年が進むにつれて固定化する傾向がある。
 2. 二年、三年から遅進生徒になることは少ない
 3. 一年一学期に遅進生徒になった者は、その後も遅進生徒に留まっている傾向がある。学力を回復しても中位ないし、上位になることは少い。
 4. 二年二学期に遅進生徒になっても、回復の望みは大きい。しかし、上位になることは少い。
- 1, 2, 3, 4, を総合して考えると、一学年初期の学習態度が他の時に較べて、その後の学力に影響することが多い。
- 本校では自然学級を編成しているが、他校における「お客様」の生徒は非常に少いということをもとに、1 から 4 までの結果について考察してみる。
- 1, 3は基礎学力を得られない為に起ることを考えられる。アルファベットが正確に書けない生徒などがこの例となる。

2は、学習初期に学習態度を会得した者は、比較的容易にその後の学習を続けることができるからではないだろうか。

4は一時的に学習を怠った為に遅進性になったのであろう。このような生徒は基礎学力を一学期に得ている故に回復しやすいと考えられる。

今後は、この調査の信頼度を確かめる為に、又指導の方法、時期を知る為に次の様な事を続けてみたい。

- 調査対象を増す為に今後二年ないし三年同様の調査を試みる。
- 生徒の学力に影響する要素（性格、家庭情况等）を合わせて考えてみる。
- 標準テストなどによって分布曲線の補正を試みる。

○ 他教科との相関を調べる。

参考資料 1

各テストの中間数(M)と標準偏差(S.D.)

昭和38年度

第一学期中間テスト M=82.1 S.D.=9.5

期末テスト M=63.3 S.D.=18.9

第二学期中間テスト M=70.2 S.D.=17.5

期末テスト M=79.9 S.D.=14.6

第三学期テスト M=71.6 S.D.=14.2

昭和39年度

第一学期中間テスト M=84.9 S.D.=9.5

期末テスト M=75.4 S.D.=14.1

第二学期中間テスト M=72.8 S.D.=14.3

期末テスト M=75.5 S.D.=13.4

第三学期テスト M=72.8 S.D.=16.3

昭和40年度

第一学期中間テスト M=75.8 S.D.=15.6

期末テスト M=61.4 S.D.=20.3

第二学期中間テスト M=66.4 S.D.=18.3

期末テスト M=71.3 S.D.=21.3

参考資料 2 遅進生徒の典型的な例

